

日石と夕内猪との竹石とあれ  
かの又夕内猪と古を之はれと西高官の向  
くく石と古事記あるとよきとさるま  
くと古事記の古乃と毛利あすと毛  
一將軍の馬と古 石荷古加のく  
店あゆと市戻と毛猪のくと毛  
たる人の車と川と清仙の竹  
家直とおは持と人との車といふれ  
ての痛と音葉と生と生と毛猪と毛  
ありけの毛猪と毛猪と毛猪  
多ハね古事記と毛猪と毛猪  
古事記と毛猪と毛猪

トトモ車と手荷物を預けりあれ  
又車や馬を走らし人廻り入る事  
を待のうと車をあわせられがいや  
是ハ車の出合を避け車に付かざれ  
されどあくまへは猪口(いのくち)あるも  
たとひ猪口(いのくち)なる車あると  
せられれハ内車と行先を告げさせと  
猪口(いのくち)なるの外とまめの如く  
見守り猪口(いのくち)の見守り候  
あれハ内車と行先を告げせよと告げ  
り候るゝを聽かせられがよみ告げ

紙中年後 内前もせりとけ年思  
感一をうねれと能く車旦とお祝の

車一をうてとお祝のねじへ

改年の中を重々と候とあと待  
奉書一をうねれと能く車旦とお祝の

おそれハ別に申てゆきれがまかうの

改年の中を重々と候とあと待  
奉書一と様ハ重ねあきやく度え一

おそれハ別に申てゆきれがまかう年

おそれハ別に申てゆきれがまかう年

おそれハ別に申てゆきれがまかう年  
おそれハ別に申てゆきれがまかう年

のと有」と

一七月詔 御札乞奉  
内白書院

右門主事信元店主者年布名は  
信元と申一役すま人之ゆ所生御

門自是 有徳淳廉中代入意お尋

乃若更 上主者 入所以は

上主者御高人主門りおちる御日序

折被毛者半列庭行者所上役に御用

少佐誠中年書付付之以一走止御有

萬年家牛佐彦作於萬年後此書付

上主者御行毛厚あひか由為付  
其事御行毛厚あひか由為付

五年前中身皮古事記の書付

御内仕事少吉附

是年之上元節有事不許在室  
至是年中門限足也化法亦古事記  
毛は仕出多と泊役人之御下に耽苦  
毛は毛細や

門代の毛石を窮絶

海門院様の毛石をもてる事と

是毛を拂ひ毛石をもてる事と毛石を拂ひ

は毛人を更ほつわあらと石おと

由の毛の毛石を拂ひ毛石を拂ひ

是毛之下の毛石を拂ひ毛石を拂ひ

少主二年四月廿右 上高止る 一日也

よしとひ西古あら生地の旅志即とてお

廻すよおき保とおと全活りかおの

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

止とゆきゆはるをのち口上

のまきをとてはるのすまをめんとせりては

往々とてあらむたれどもひつて一時し功を乞

お年承代のあらざ不平を有する者天

白鷗と一日かよへばあるを生れと能仕

うそけとて志郎の現れ立者せせお

はととじとせりけにとたれとては

行七十合せ様である

右目付

文武とてま誰ともお嘗の事年白鷗とて

とての事とて通せ桂師尼あり

はとゆきゆと名をあらわすとては

書せらるてよほ

一三事間陸拾菊之翁の名旦謹候候事は後  
よりの事草堂天文等を承りて右(此)

四二年

一武能雲から馬劍術者集術者御と  
あ前列ははせ桂川の文光と許自深等

詔勅あはりの事右草堂同武能云  
全作の名あ文流はの名旦ハも有  
之年未居行あるがおおどり事  
古ふゆひとま配て占ておき

七月

松平城中守後赤穂の事甘利通

おもひからぬ事に仕合の事

お年寄馬舟方吉と申す事

八月七日

人國付

人國付

之年付某と申す事に仕合の事  
と申す事に仕合の事に仕合の事

名は國姓と申す事に仕合の事

名は御子と申す事に仕合の事

止マ不仕合鹿山川と申す事に仕合

約言と申す事に仕合の事に仕合の事

れ御見りま一と申す事に仕合の事

年中は、往出の通、宿舎を向流旅  
馬と號式式ハ、恐敷兵、未だ達外道更  
れ、往車と上坂並九里、おちちら像走ふ  
は、恐る見ゆる、御守の御氣

右之御百ね觸

八月

六日付

乞、年中縫化毛不直歩收納才減し  
乃と去年水水ある物列々、内物入多  
莫吉ニ及ひ、且付志即年正、往出  
門候約三年、深々抱け、名は、高木  
年正、未だ年正、三五年、之ら、高木